

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、1965年の53万トンにピークに減少傾向となり、1980年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、1996年には33万トンに増加し、1998年までは30万トン台で推移しましたが、その後再び減少傾向に転じ、2020年は9万8千トンとなりました。

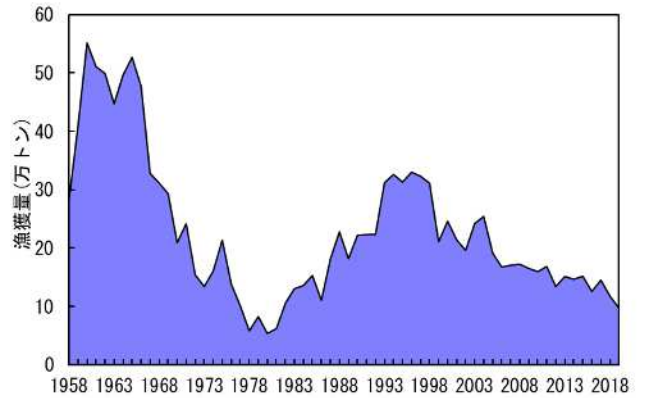


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の2022年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、10月に天草沖、五島下でマアジ仔（0歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。11月に五島下、串木野沖、縄瀬でマアジ仔（0歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。12月に牛深沖でマアジ仔（0歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、10月、11月に内之浦沖でマアジ中小（1歳魚：2021年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で953トンの水揚げで、前年の263%及び平年の154%でした。

3. 県内の2023年1～3月期の見とおし

漁獲主体：マアジ小、豆（1～2歳魚：2021～2022年生まれ）

来遊量：前年並で平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期もマアジの2022年生まれ主体に2021年生まれが混獲されることが予測され、前期の漁況より前年並で平年を上回ると考えられます。

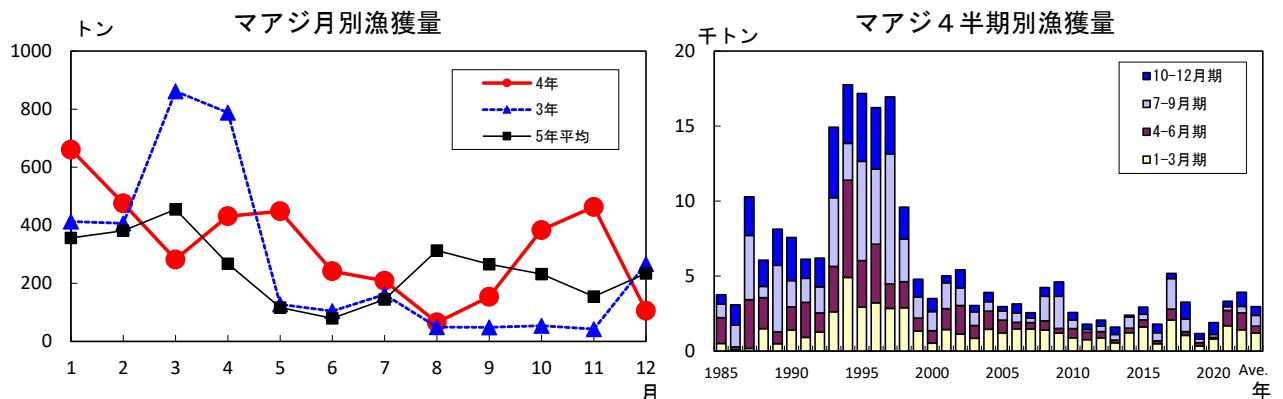


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV）、2022年12月21日までの水揚量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、1978年の160万トン进行ピークに年々減少し、1991年には26万トンとなりました。

1993年から増加に転じ1997年には85万トンとなりましたが、2002年には28万トンまで減少しました。

2006年に65万トンまで増加したあと減少傾向となり、2020年は39万トンとなりました。

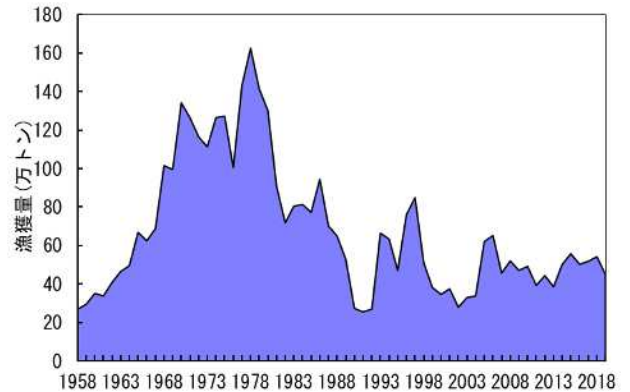


図 全国のサバ類漁獲量の推移

年

2. 県内の2022年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、10月に五島下、串木野沖、天草沖でサバ類豆（0歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。11月に五島下、縄瀬、串木野沖でサバ類豆（0歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。12月に甑東でサバ類豆（0歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、10月に島間でゴマサバ中（3～5歳魚：2017～2019年生まれ）、ゴマサバ豆（0歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。12月に野間池沖でサバ類豆（0歳魚：2022年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で1,737トンの水揚げで、前年の106%及び平年の56%でした。

3. 県内の2023年1～3月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ中小～大（3～6歳魚：2017～2020年生まれ）

マサバ中小～大（3～6歳魚：2017～2020年生まれ）

来遊量：前年並で平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は、ゴマサバの産卵親魚群とマサバの産卵親魚群が漁獲の主体となります。サバ類の主要水揚げ港である枕崎港における前期のゴマサバとマサバの漁模様から、前年並で平年を下回ると考えられます。

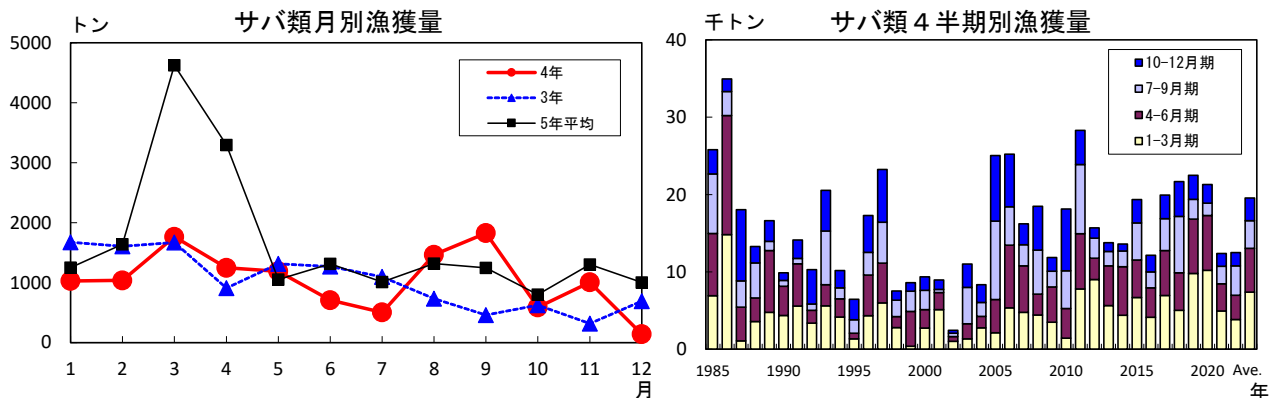


図 サバ類まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2022年12月21日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、1950年代から1960年代にかけての不漁期の後、1973年頃から増加の傾向が見られ、1988年には449万トンまで増加しました。

1989年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、2002～10年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、2011年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、2013年以降は20万トンを超える漁獲が続き、2020年には70万トンとなりました。

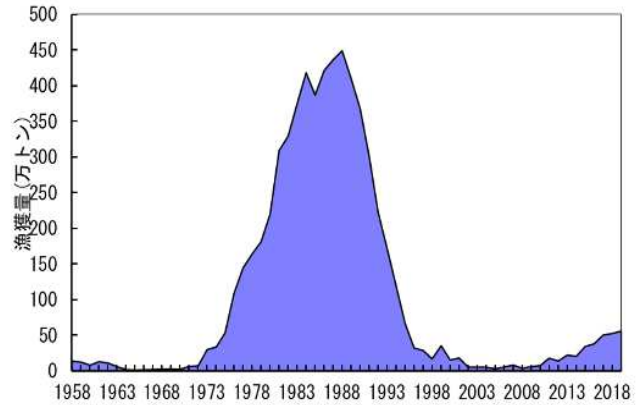


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の2022年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、10～11月に五島下で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、小～中羽（0歳魚：2022年生まれ）主体に108トンの水揚げで前年の33%、平年の23%でした。

北薩海域の棒受網では、4トンの水揚げで前年の73%、平年の7%でした。

3. 県内の2023年1～3月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽（1歳魚：2022年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲主体となる中～大羽（1歳魚：2022年生まれ）は、前期に期を通して低調に推移したことから、低調であった前年・平年を下回ると考えられます。

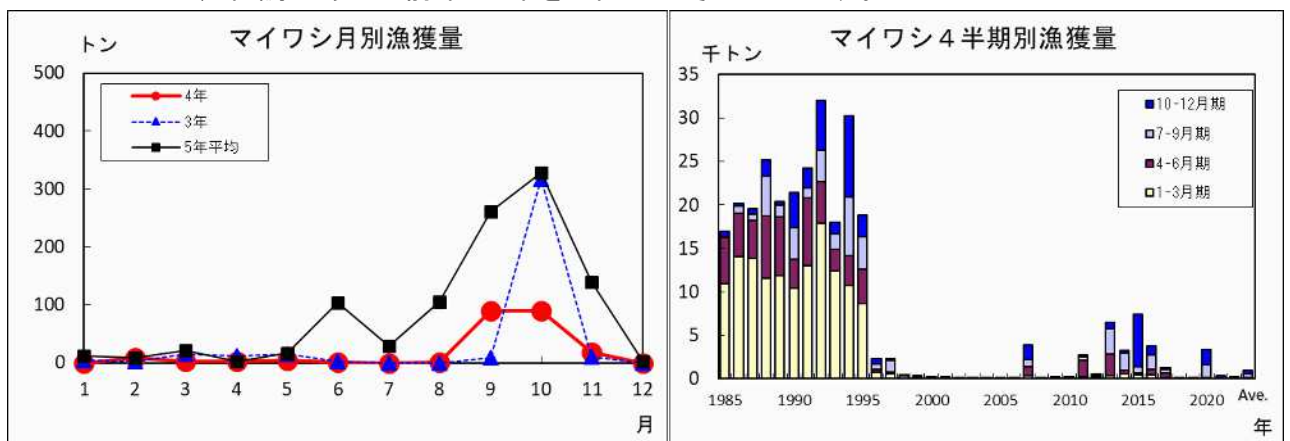


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2022年12月21日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、1950年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、1994年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ2000年には2万4千トンまで減少しました。

2003年以降は再度増加傾向に転じ、2016年は9万8千トンで1958年以降では最高の漁獲量となりましたが、2020年は4万トンと大きく減少しました。

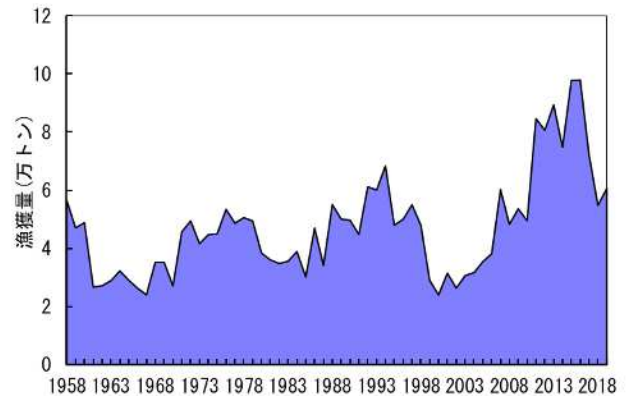


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の2022年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、10月に甑下、甑東、10～11月に五島下、天草西沖、縄瀬で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、11月に野間池沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中～大羽（0～1歳魚：2021～2022年生まれ）主体に432トンの水揚げで、前年の27%及び平年の23%でした。

北薩海域の棒受網では、125トンの水揚げで、前年の59%及び平年の55%でした。

3. 県内の2023年1～3月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽主体（1～2歳魚：2021～2022年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

中～大羽（1～2歳魚：2021～2022年生まれ）が漁獲主体となります。前期の漁況を基に予測すると今期は、前年・平年を下回ると考えられます。

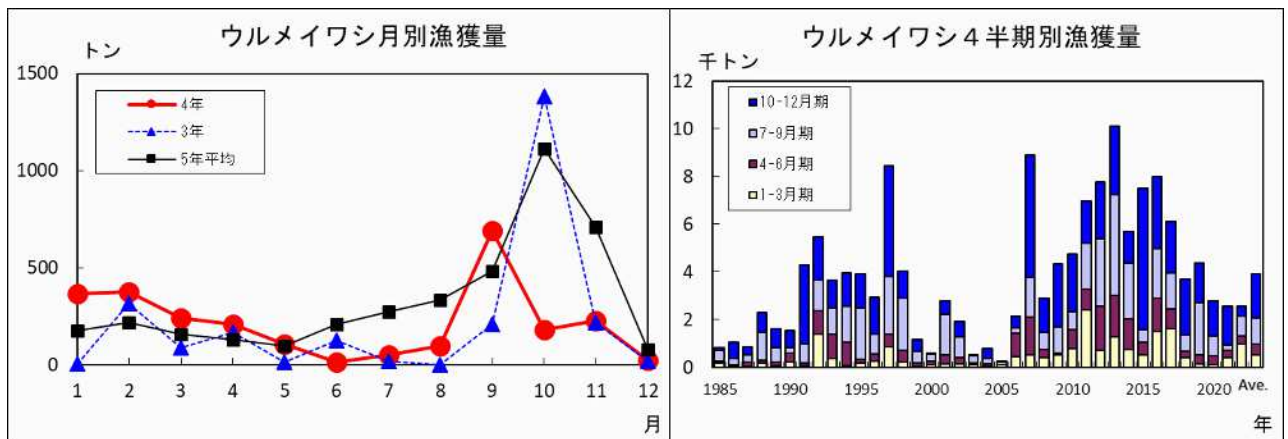


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV）、2022年12月21日までの水揚量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、1973年まで30万トン台で変動していましたが、1974年以降減少傾向となり1979年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、2003年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、2020年は14万トンとなりました。

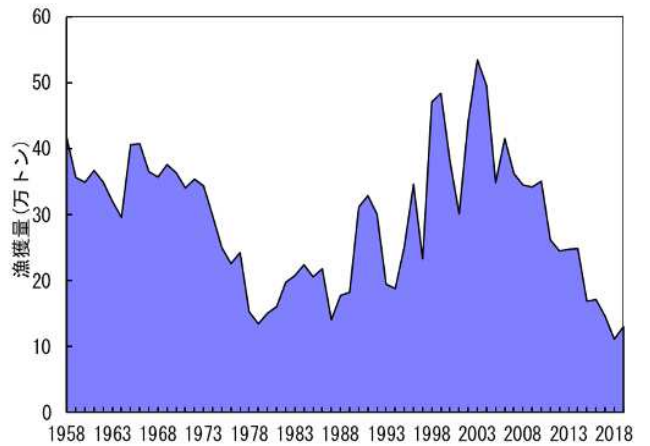


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の2022年10～12月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、10月に天草西沖で小規模な漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、5トンの水揚げで、前年の1%及び平年の1%でした。

北薩海域の棒受網では、2トンの水揚げで、前年の18%及び平年の6%でした。

3. 県内の2023年1～3月期の見とおし

漁獲主体：中羽（1歳魚：2022年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期の漁獲量は、期を通じて低調に推移しました。また、シラス秋漁も低調な漁模様であることから今期は、前年・平年を下回ると考えられます。

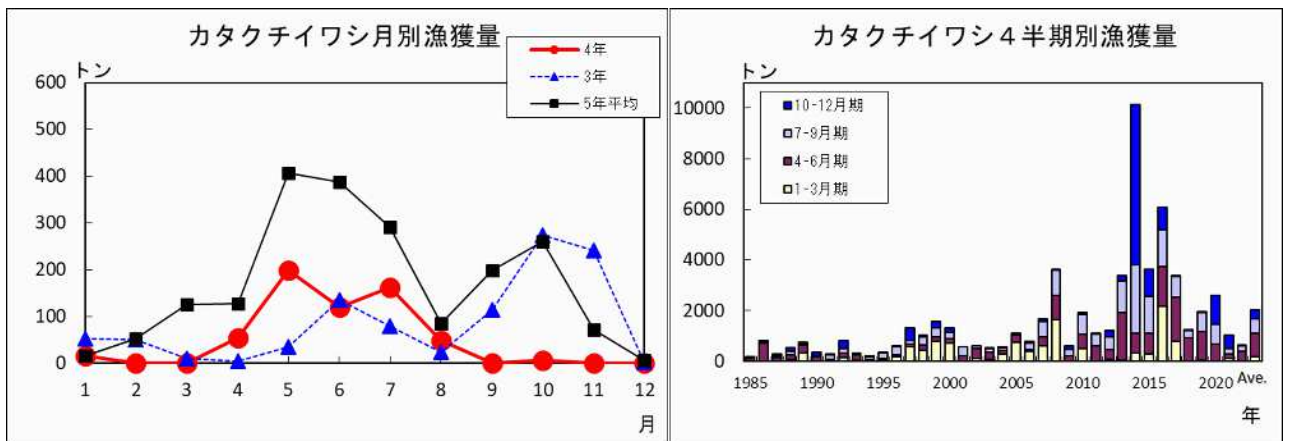


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2022年12月21日までの水揚量を使用

[シラス]

1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では、1999年の5,450トンをピークに減少傾向を示し、2002, 2003年と1,000トンを下回り低調に推移しました。その後、2004年は3,507トンと比較的好調に推移しましたが、2005年以降減少傾向を示し、2020年は1120トンとなりました。

志布志湾海域では、2007年まで増加傾向を示しましたが、その後、1,000トン前後で増減を繰り返しながら推移し、2020年は1228トンとなりました。

2. 2022年9～11月の漁況の経過

西薩海域では、カタクチシラス主体に27トンの水揚げで、前年の22%、平年の8%でした。

志布志湾海域では、カタクチシラス主体に40トンの水揚げで、前年の14%、平年の11%でした。

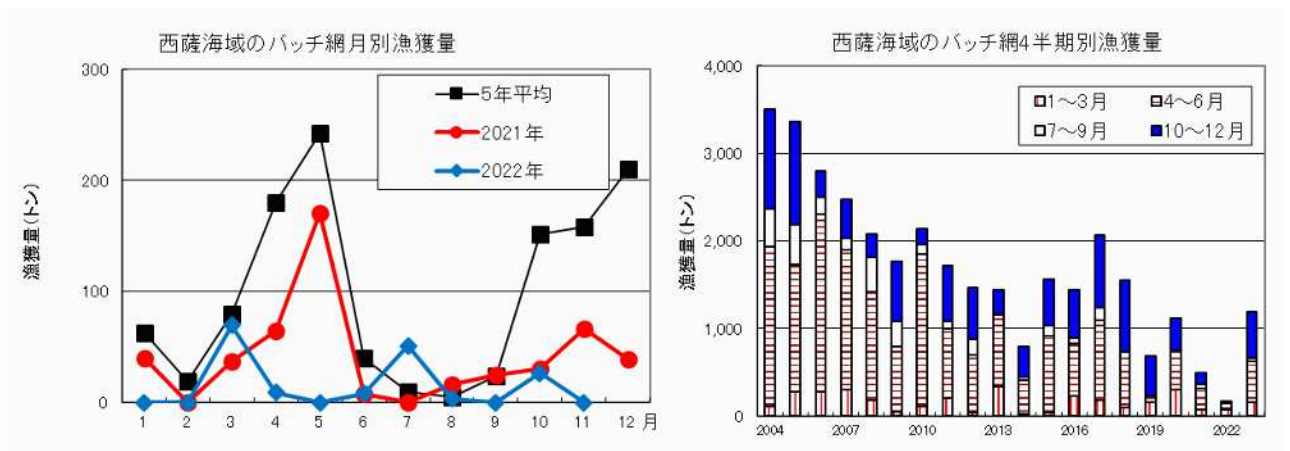


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

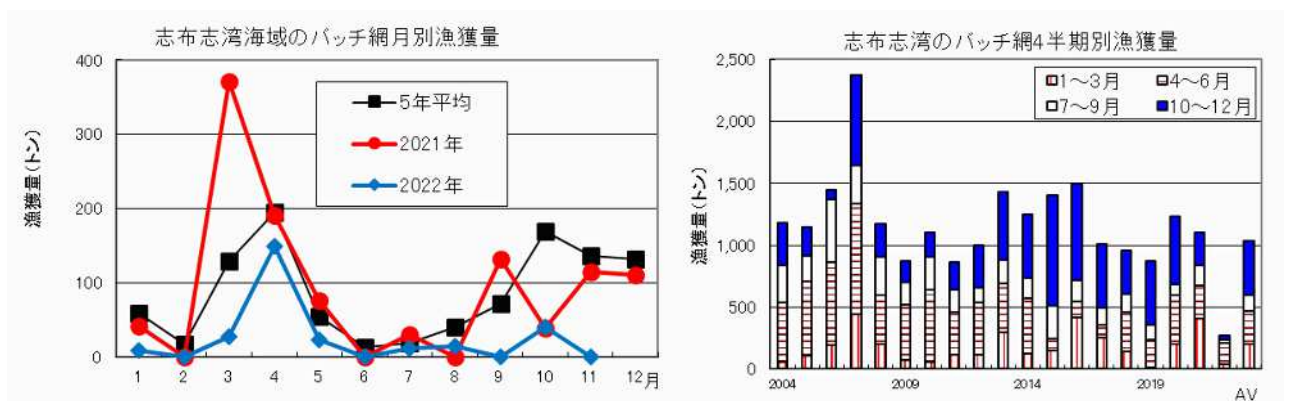


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 2022年11月30日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

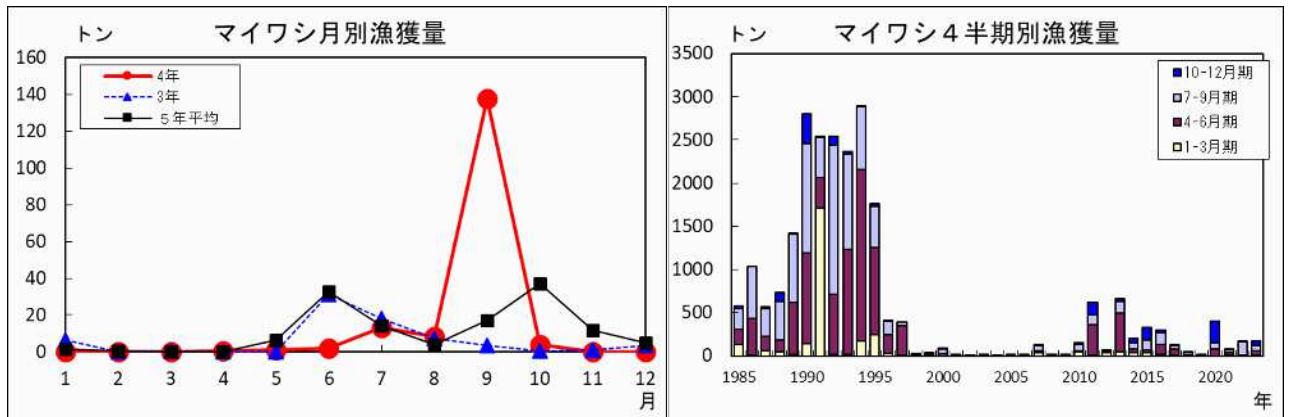


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

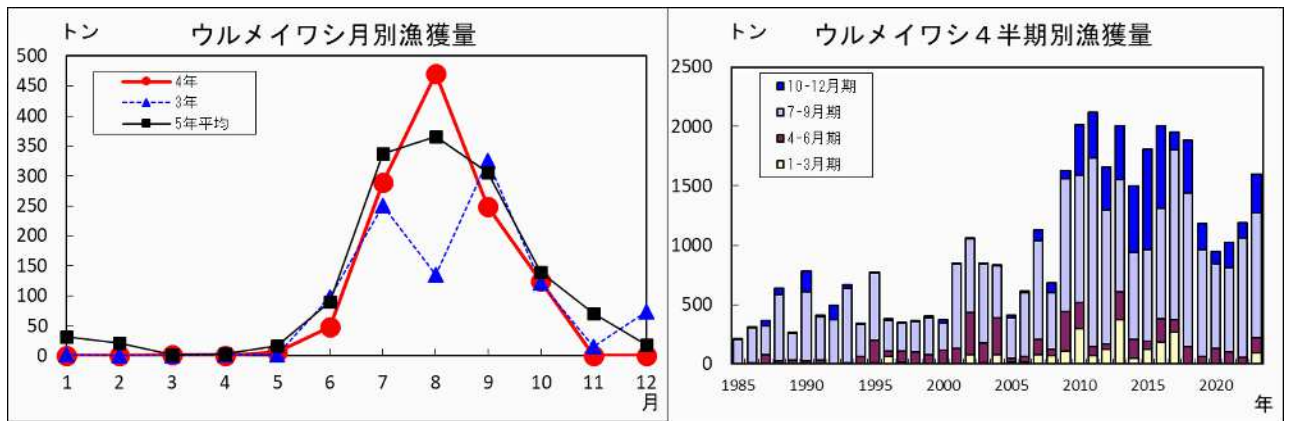


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

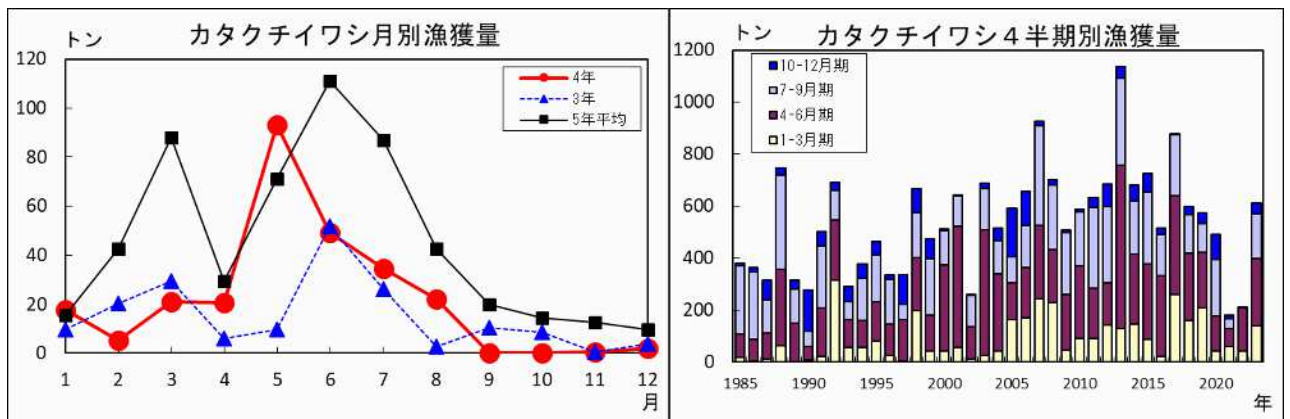


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 2022年12月21日までの水揚量を使用

[ムロアジ類 (参考：漁況経過のみ記載)]

〈クサヤモロ、ムロアジ、モロ (水産技術開発センター調べ：4港計)〉

1. 経年経過

ムロアジ類の漁獲量は、1990年の21,700トンにピークに急減し、1994年以降は、1,500トンから5,000トンの間での推移しており、2021年は3,017トンとなりました。

2. 2022年10～12月の漁況の経過

4港計のまき網では、島間、種子島南でクサヤモロ小、中小主体の漁場が形成されました。期全体で1,509トンの水揚げで、前年の110%及び平年の109%でした。

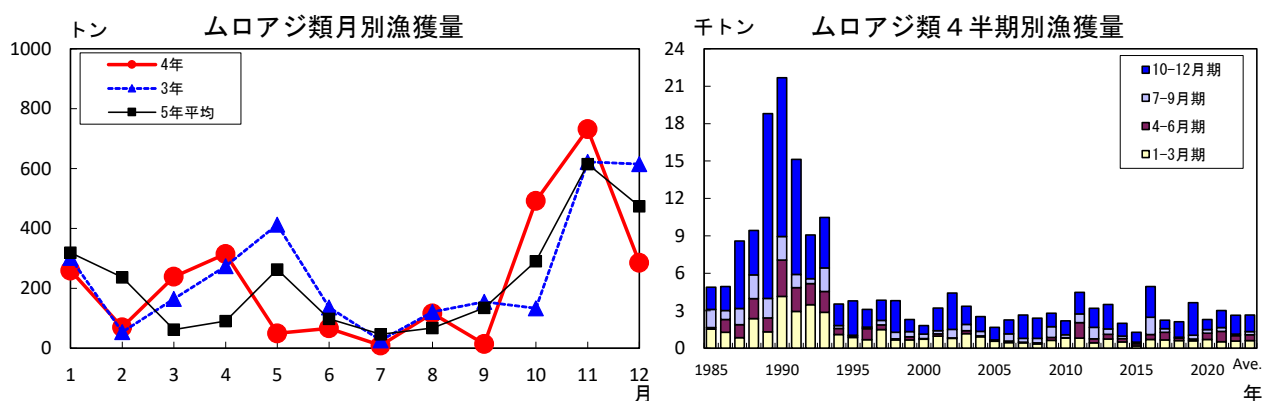


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2022年12月21日までの水揚量を使用

〈オアカムロ (水産技術開発センター調べ：4港計)〉

1. 経年経過

オアカムロの漁獲量は、1989年の5,300トンにピークに一旦減少し、1995年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。2008年に2,300トンまで増加した後は700～2,400トンの間で推移していましたが、2021年は416トンと大きく減少しました。

2. 2022年10～12月の漁況の経過

4港計のまき網では、口永良部島西、黒島でオアカムロ豆主体の小規模な漁場が形成されました。期全体で40トンの水揚げで、前年の33%及び平年の15%でした。

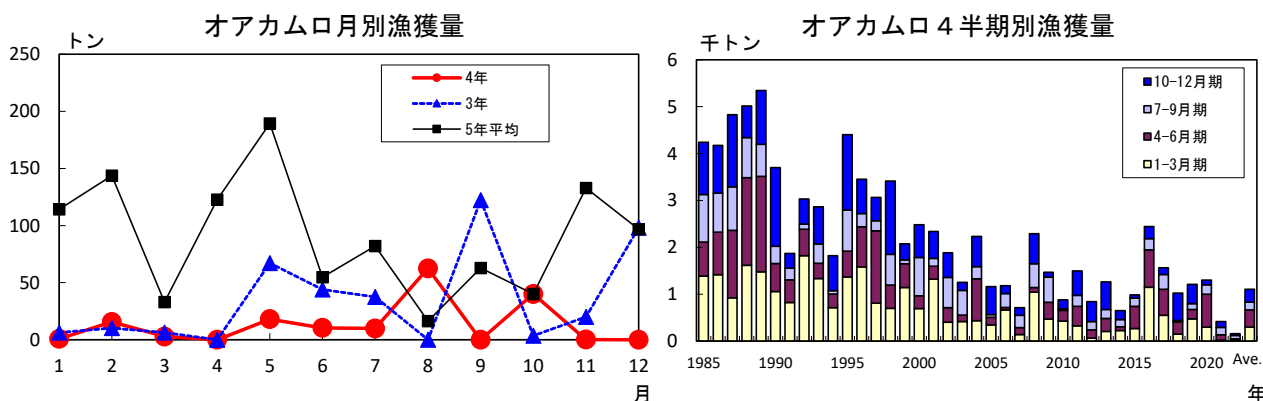


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2022年12月21日までの水揚量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

1. 経年経過

マルアジの漁獲量は、1987年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、2000年から2003年に再度ピークを迎え2003年には3,150トンとなりましたが、2004年以降は低調に推移し、2021年は176トンとなりました。

2. 2022年10～12月の漁況の経過

4港計のまき網では、串木野沖でマルアジ豆主体の漁場が形成されました。期全体で31トンの水揚げで、前年の42%及び平年の47%でした。

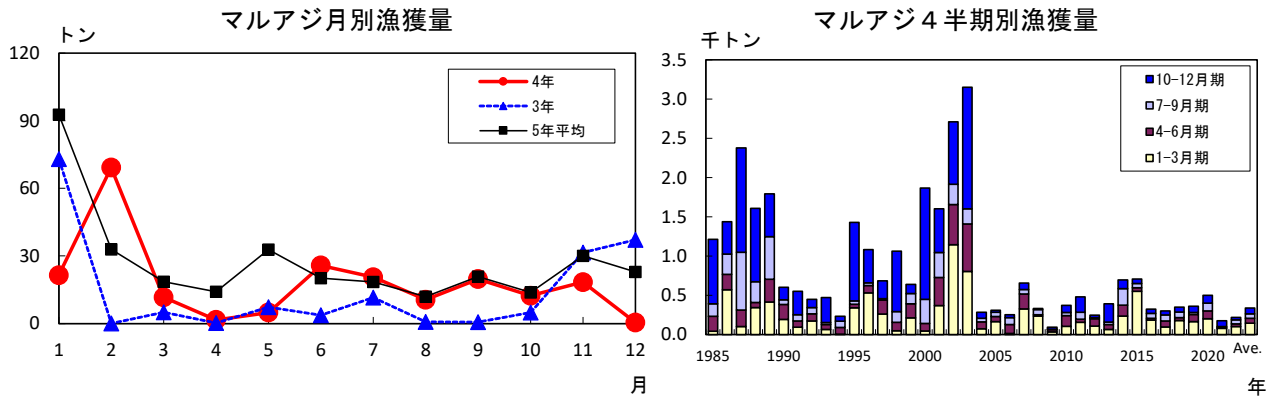


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、2022年12月21日までの水揚量を使用